

阿修羅城の瞳

2005(平成17)年4月16日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★★



監督＝滝田洋二郎／原作＝中島かずき(劇団☆新感線)／出演＝市川染五郎／宮沢りえ／樋口可南子／小日向文世／内藤剛志／渡部篤郎(松竹配給／2005年日本映画／119分)

……「女は恋をすると鬼になる」という名キャッチコピーと近時とみに色香を増し(?)大女優への道歩んでいる宮沢りえの出演。しかも原作は、私が大感激した『花の紅天狗』と同じく劇団☆新感線の中島かずき。これは観なければ……。ホントは演劇と対比すればベストなのだが、それはまたのチャンスに。「この作品に惚れぬいた」という市川染五郎の熱演が光る、江戸版エンターテインメントだが、さて今どきの若者たちはどう反応するのだろうか……?

時代劇エンターテインメントは難しいが……?

劇団☆新感線の舞台は時代劇が多い(すべてそう?)。私をはじめて観て感激した『花の紅天狗』(03年)もそうだった(『シネマルーム3』378頁参照)。しかし今どき、時代劇をどのようなエンタメ作品に仕上げるのかはきわめて難しいはず。もっとも、日本人には常に一定の時代劇のニーズが存在するから、山田洋次監督をはじめてつくった時代劇である『たそがれ清兵衛』(02年)やそれに続く『隠し剣 鬼の爪』(04年)、さらに滝田洋二郎監督の『壬生義士伝』(03年)など本格的時代劇はそれなりにヒットしている。

しかしパンフレットによれば、「ハリウッド流のエンターテインメント作品に対抗するにはどうしたらいいだろう?」と考えていた宮島プロデューサーは、「アン・リー監督の『グリーン・デスティニー』(00年)を観て、感動と同時に、先を越されたという悔しさを感じた。中国語の映画がアメリカはもとより世界中で支持されている。今こそ日本独自のエンターテインメントを発信しなければとい

う思いに駆られていた時、以前から大ファンだった『劇団☆新感線』の舞台が思い浮かんだ」とのこと。

しかし日本におけるエンタメ作品を時代劇でつくるのは難しいはず。だって今どきの若者には、この時代劇映画を本当に理解するために必要な基本的知識もっているはずがないうえ、それを勉強しようという意欲も薄いはずだから。そして逆に、江戸文化や江戸歌舞伎そして鬼や阿修羅について一定の知識もっているおじさん、おばさんたちは、この映画が見せるスピーディな展開や色彩の奇抜さそしてCGを使ったスクリーン操作などに一定の拒絶反応があるはずだから。

こんな私の予想（心配）どおり、公開当日の土曜日の夕方に出かけていったにもかかわらず、観客はガラガラに近い状態。きっと同日封切られたキヌ・リーブス主演の『コンスタンティン』の方に多くの若者が流れたのでは……？

私と市川染五郎

私は本来の古典芸能としての歌舞伎はあまり好きではないが、歌舞伎役者が出演するミュージカルや演劇は大好き。先代市川染五郎（松本幸四郎）の代表的なそれは、何といても60歳にして千回を超える舞台出演を果たし、今なお演じ続けている『ラ・マンチャの男』（69年初演）であり、また『アマデウス』（82年初演）だ。私はまた、スーパー歌舞伎を主催する市川猿之助の『新・三国志』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲも大好き。しかしスケベおやじの私（？）としては、どうしてもその興味がキレイな女優やアイドルの方に行くため、松本幸四郎に7代目市川染五郎を襲名した息子がいることは知っていても、私の興味は、同じ松本幸四郎の娘の松たか子が出演する映画や彼女が歌う歌の方にウエイトがあった。そんな私だから、真面目に（？）市川染五郎を観たのはこれがはじめて……。

市川染五郎って面白いやん！

市川染五郎は1973年生まれだから現在32歳。劇団☆新感線の『阿修羅城の瞳』の舞台にはじめて出演したのが2000年で、以降『アテルイ』（02年）、『阿修羅城の瞳』（03年再演）、『髑髏城の七人』（04年）にも出演。彼は歌舞伎役者として名門中の名門の家に生まれたのだから、小さい時から芸の道について厳しい訓練を

受けてきたのは当然だろうが、劇団☆新感線の舞台を観て、「これは現代の歌舞伎だ!」と感激して「自分が劇団☆新感線の舞台に立ちたいと願った」というからスゴい。

この染五郎の願いが、13年間眠っていた中島かずき原作による傑作を現代に甦らせ、2000年の『阿修羅城の瞳』の初上演に至ったというわけだ。演技が上手いのは当たり前だが、そんなことを考えた歌舞伎俳優の市川染五郎って面白いやん!

人生イロイロ、鬼もイロイロ……

この『阿修羅城の瞳』では鬼は、「人を喰らい、人の世を滅ぼそうとする異界からの来訪者。千年の昔から、人と同じ姿をとって存在。阿修羅復活を待ち望む美惨に率いられ、今や江戸の街を跳梁跋扈している」という存在。この映画の舞台は、江戸文化が花開いた江戸で、時代は19世紀前半。しかし、同じ鬼を描いたのが滝田洋二郎監督の『陰陽師～おんみょうじ～』(01年)と『陰陽師Ⅱ』(03年)。そのⅡの舞台は京の都。そして陰陽師は実は出雲の国の王だということになっている。

また、『阿修羅城の瞳』の主人公は、もとは鬼御門おにみかどの副長であり、今は舞台役者となっている病葉出門わくらばいずも(市川染五郎)だが、『陰陽師Ⅱ』の主人公はそのタイトルからわかるとおり当然、安倍晴明。

このように同じように鬼をテーマとしていても、「鬼もイロイロ」だから、その出典から勉強しなければ……。

阿修羅とは?

阿修羅とは、この映画では、「鬼を救うとされる鬼の王。もとは古代インドの戦闘神で梵名はアスラ。仏教では帝釈天に幾度も戦いを挑む悪鬼として登場し、後に釈迦に帰依して仏法の守護神となったとされる。仏像では3つの顔と6本の腕を持った(三面六臂)、奈良・興福寺の阿修羅像が有名。憂いを含んだ少女のような面立ちで、見る者を惹きつける。ちなみに弥勒は、釈迦入滅の56億7000万年後にこの世に現われ、釈迦の救いに洩れた全ての人々を救うとされる未来仏」

とされている。そしてこの映画後半のミソは、「阿修羅城の城」。

しかし同じ阿修羅でも、視点によって全然違うものになる。その代表が森田芳光監督の名作『阿修羅のごとく』（03年）（『シネマルーム3』344頁参照）。そのパンフレットでは、阿修羅とは、「表面的には仁義礼智信をかかげながら、実は猜疑心が強く、互いに事実を曲げ、他人の悪口を言い合う、言い争いの象徴とされるインドの神」とされ、女はまさに阿修羅の生き物というのがこの映画のテーマ。

原作の中島かずきが描いた『阿修羅城の瞳』のテーマは、あの有名なキャッチコピーの「女は恋をすると鬼になる」というもの。阿修羅が本来女性なのかどうか私は知らないが、この有名なキャッチコピーは実に面白い。そして阿修羅は「鬼を救うとされる鬼の王」だから、当然人間の敵。そうすると宮沢りえと市川染五郎は一体どうなるの……？

鬼御門、笑死、百鬼夜行そして……

『陰陽師』Ⅰ・Ⅱと同様、この『阿修羅城の瞳』を真面目に観るためには、必ずパンフレットを購入して、そこにある「阿修羅城の瞳 用語解説」を勉強する必要がある。そうしなければ、ストーリー展開の中に再三登場してくる「鬼御門」「笑死」「百鬼夜行」などの言葉が理解できるはずがないから。

また、「結界の橋」「逆しまの縁」なども、予備知識としてこんな言葉を知っている人は少ないはず。したがって事後でもいいからきちんと勉強しなければ、この映画を観たことによる学習効果は次第に減退していくだろう……？

原作者中島かずきの発想の豊かさと知識の深さに感嘆！

私は、芝居や演劇の原作者とか映画の脚本を書く人を大いに尊敬している。だって、それができるのは、文章力もさることながら、発想の自由さや豊かさによるものだから。舞台版『阿修羅城の瞳』も、何回か上演されるにつれて、役者も変わればストーリーやセリフも変えられているはず。何も87年上演の原作にこだわる必要はなく、上演回数が重なるにつれて観客の反応を見ながら、また役者の能力を見ながら改訂を重ねていけばいいのは当然。

しかしそれを実行するためには原作者や脚本家に必要なのは、研究心とそれに裏づけられた豊富な知識。この映画では、「瀬をはやみ岩にせかるる滝川の……」という句（短歌）が再三流れる。これが百人一首にある崇徳院の歌だということをしちんと知っている観客は1%もいないはず。ましてその意味は……？

そしてまた、鬼に目覚めたつばき（宮沢りえ）が突然ワケのわからない言葉をしゃべりながら、夢遊病者のようにある場所まで歩いていくが、その時のセリフはパンフレットによれば、「茨木葛城悪路王紅葉土蜘蛛御将門……」。セリフをしゃべっている時に字幕で出してもらわなければ、こりゃわかるはずがないもの。そしてその意味は……？ パンフレットに詳しく書かれているので是非それを勉強してもらいたいが、これは「原作者が、統治する側の人間に“鬼”と呼ばれて蔑視・畏怖された者に関する言葉を並べて作った歌の文句」とのこと。そしてそれは鬼にまつわるキーワード(?)の宝庫！

舞台から映画へ、その出来は？

舞台ではつばき（阿修羅）になる女性は、初代が富田靖子で2代目が天海祐希。また美惨は初代が江波杏子で2代目が夏木マリ。そして映画では、つばきが宮沢りえで、美惨は樋口可南子。しかし主人公の病葉出門は一貫して市川染五郎だ。また、安倍邪空や四世鶴屋南北ら個性ある登場人物たちもそれぞれ面白そうな役者を配しており、映画を観ただけでも舞台の楽しさを十分想像することができる。ただし、パンフレットから勉強しただけの知識だが、舞台に登場したという13代目安倍晴明は映画では登場しない。つまり映画ではそれが内藤剛志演ずる鬼御門の頭領国成延行に変更されているわけだ。これは、映画版としては2時間に短縮する必要があるうえ、何よりも滝田洋二郎監督が『陰陽師』I・IIを監督しているのだから、そのイメージがダブったのでは話にならないから……？

さて舞台と映画、その出来はどうだろうか……？ 全舞台を観たうえで、この映画を観た人は是非御意見を……。

2005(平成17)年4月18日記